随筆

今日の若い人

黒田英三*

University students today

Key Words: University students, Life style, Discipline

「最近阪大には髪を染めた学生がいますね」，大学の後輩で大手電機メーカーの管理職をしている人と会ったとき，本当に驚いたという口振りでこんな話をしてくれた．母校を訪れたとき，廊下から講義室の中を覗くと髪を染めた学生がいたというわけである．「君は何年間阪大に来なかったの?」と私は苦笑を禁じえなかった．巷の若者たちよりいくぶん比率は少ないとは思うが，阪大生の髪の毛も色とりどりである．新入生の中には春のうちこそおとなしくしているのもいるが，夏頃には上級生と変わらなくなってくる．正確に数えたことはないが，2,3年生の3割から4割前後は染めているのではないだろうか．ただ，4年生や修士2年になって就職活動が始まると，それまでの茶髪(ほかに金髪，青色，緑色と多彩である)を黒に戻して神妙に面接に臨む．うまく就職が成功するとまた染め戻すから，学生の髪の色を見ていると，本人に尋ねなくても(かれまたはかの女の)就職活動の成否が手に取るように分かる．したがって，企業サイドの人たちは，髪を染めた状態の阪大生など想像もしなかったのであろう．私自身，約10年前には髪を染めた学生を目にすると苦々しく思ったものだが，今では学生の髪の色に別段何の感慨ももたなくなっている自分に驚く．

髪の色はともかく，阪大にいても日ごろいろいろと学生の不愉快な言動や珍行動に戸惑うことが多い．本誌に係わる方々がふだん接触される学生の多くは，学部の上級生や大学院生が大半であると思うが，私は阪大の1,2年生に対する講義や実習を担当することが主たる業務であるから多少趣を異にする．そのような学生の(われわれ中高年層には理解し難い)今日の行動や言動のごく一部を紹介し，私なりにこれらに対処する方法を考えてみたい．

読者の方々，特に私と年齢的にさほど離れていない中高年の方々は，日頃町の中での若者の行動に眉をひそめられることが多いと思う．町で見かける若者の服装や言動の多くは，そのまま阪大キャンパスでも見かけることができる．駅や路上あるいは電車の中，所構わず地べたに座り込む．大学キャンパス内でも階段や廊下などではもちろん，ひるどきの学生食堂の周辺では，食べ物を地面に置いて座り込んで食べる姿も見かけるし，講義室の後ろの床に座り込み，壁にもたれかかって講義を聴く姿も見られる．また，授業中に学生に指示を与えたりする場合，それが学生の気に入らない内容だったりすると，即座に「マジ?」と返事が返ってくる．少しはこちらに敬意を表わさなければと考えているらしい学生からは「マジッすか?」．さらに，ここ数年で増えてきたのが「ウソッ!」．これらの発言を丁寧に書き改めると「真面目にお考えでしょうか?」あるいは「嘘をおっしゃっては困ります」ということで，教官に対する発言としてはずい分失礼な意味をもつ．ところが，学生はもちろん本気でこんな意味のことをいっているのではなく，自分が困るときには反射的にこれらの発声をしてしまうのである．これにいちいち腹を立てていたのでは，こちらの神経がもたない．

私が東野田の学舎に通っていた学部や大学院時代は，廊下を歩くときに暗黙のマナーがあって，前方から恩師や目上の方が歩いて来られた場合には，廊下の端に寄って立ち止まるか歩調を緩めて，軽く一礼あるいは会釈をしたものである．別段誰かに教わったわけでなく，先輩たちがそうしていたので，それを見習って真似ていただけのことである．中には当

* Eizo KURODA
1938年6月生
1962年(昭37)大阪大学工学部電気工学科卒業
現在，福井工業大学，教授(客員)，大阪大学名誉教授，工学博士，身体運動学
TEL 0776−22−8111(代)
FAX 0776−29−7891

時の教授で非常に穏やかな方がおられて，廊下で出会うと先生の方が立ち止まられる．当然こちらも立ち止まるわけで，どうしたものかと困ったことも今では懐かしいエピソードである．私の所属する健康体育部の近くに見通しの悪い小道があるが，これは私が毎日利用する通勤路にもなっている．ここを学生の自転車がスピードを落とさないで駆け抜ける．思わずはっととして立ち止まることもしばしばである．ひとこと「すみません」とでも言えばいいものを，全く無言で通り過ぎる．最近はずい分と人間が丸くなったつもりの私も，さすがにこれは見過ごすことはできず，学生を呼び止めて怒鳴りつける．すると，そこで初めて人がいたことに気がついたかのように丁重に謝る．学生を叱りつけながら，いみじくも40年前の東野田の廊下での優雅な風習を思い出すのである．

また，外国の町などでドアを通り過ぎるときに，後ろから来る人がいるとその人が来るまでドアを支えてあげることがある．するとその人は微笑みながら，「サンキュー」とお礼をいってドアを受け継ぐ．外国を訪れるときに感じるさわやかな習慣である．私は大学ででもこの習慣を続けようとしているが，ときには滑稽な出来事に出くわす．大学で後ろから学生が来たのでドアを支えていると，なんとかれは腰をかがめて，ドアを支えている私の腕の下をくぐり抜けたのである．とっさにこいつは茶目っ気のある学生だなと思ったが，本人はいたって無表情，真面目な顔つきのまま無言で通り過ぎた．奇特な教官がドアマンをしてくれている，とでも思ったのだろうか．さすがにこのときは呆れて，思わず大笑いをしてしまった．この出来事は，私が阪大で出くわす学生相手の数多くの珍体験の中でも，最高傑作のひとつである．

阪大生は，従来から躾のいいおとなしい学生とみなされてきたようである．それがどうしてこのような，われわれ中高年層をイライラさせる存在になったのか，これは議論の余地のあるところである．いろいろな考えもあろうかと思うが，そのひとつは阪大生が何年か前のように，高校生の中のエリートが選別されて入学してくるのではない，あるいは阪大の大衆化といった面から眺めるといいのかも知れない．要するに，今の阪大には別段躾がいいとはいえない普通の高校生が入学して来る，と認識する必要がある．普通の高校生であるから，その世代の若者の風俗をそのまま阪大に持ち込んでいる，と考えると日常私の体験する種々の珍現象にも説明がつく．

以下は私の私見である．最近の若者には，友人，仲間という固い殻の中で生活の場があって，よほどの動機づけがない限り，その殻の外の人間あるいは社会とは接触しようとしない，と考えられるふしがある．その殻の中では，独特のものの言い方やマナーがあって，仲間内ではそれで十分通用する．たとえば，「マジ？」，「ウソ！」などは仲間内では日常の慣用句である．また，阪大の女子学生でも，仲間同士では「お前，メシ食った？」などと平気で口にしている．ところが，仲間や身内以外の人に対するこれと同義語は，とっさには思い浮かばない．教官が学生の中に入って会話をしようにも，かれらは教官といった仲間でない人間がいると容易に会話が進まない．どうしゃべればいいのか分からないからである．また，礼儀や作法をほとんど問題としない仲間内では，少々の無礼な行為も不問のまま通り過ぎてきている．そこで，たとえば私のような身内以外の人間と接した際に，何気なく行なった行為が，かれらにとっては思いがけない非難にさらされることになる．

明らかにいえることは，かれらに対するこれまでの躾の教育が絶対に不足してきたことである．まず家庭における教育，そしてこれまでの小・中・高校における教育が不適切であったといわざるをえない．上述の殻の内，外までを考慮した教育がなされていなかったのではないかと憂慮する．手遅れになった分，われわれ大学あるいは企業でこれらを補わない限り，わが社会の将来は大変なことになる．

今の若者は，上述では仲間の世界といった表現をしたが，自分の属するあるいは置かれているコミュニティの枠内の生活を重視しなければならないという考えは十分にもっている．たとえば学部，大学院の研究を行なうゼミや研究室は，明らかに自分が身を置く殻の中である．そういう組織では，研究室の教授や教官，研究室の先輩は「身内」であって，今後うまく協調していかなければならない人たちである．また就職後の職場の上司や先輩もその範疇の人たちである．そして，いったん同じ仲間だと認識した後は，「身内」の人たちへの対処の仕方を学ぼうとするし，これらの人たちからの注意や指導に対して，こちらが拍子ぬけするほど従順に，真面目に，かつ素直に従う．それと異なり，低学年でのみ関わりのある全学共通教育の場では，教官は教壇に立っ

ている「どこかの学部の先生」であって，教官に対してしかるべき礼儀を尽くす必要はないと考えているのとは対照的である．

私は，阪大漕艇部の顧問教官(部長)をしている．漕艇部という同じコミュニティの中で，学生たちは共通の目標に向かって部長，監督などのコーチングスタッフ，OB会メンバーと日常付き合わないとならない．となるとかれらは，特にこちらが指導をしているわけでもないが，私やOBたちと円滑に接触をするし，上述したような呆れるような言動をすることも一切なく，私は漕艇部長の職務を満喫している．もっとも，部員の髪の色はさまざまであるが．

私も１年ほど前までは，電車やバスの中で携帯電話で声高に話す少年や，ドアの前の床に座り込んでいる若者を叱りつけたりしてきた．別段若者を躾けようなどと大それた考えは毛頭なく，自分の乗る電車やバスの環境を不愉快なものにしたくないという利己的な動機からであったが，現在は不本意ながらこれを控えている．最近，「同じコミュニティに属さないオッサン」からの注意に対する若者の反応が予測できなくなったからである．最近も，首都圏の図書館で騒いでいた少年たちがホームレスの人に注意され，それを逆恨みしてかれを虐殺した事件があった．仲間内でない，しかもホームレスという社会的にドロップアウトの人からの叱責が，かれらを刺激したのであろう．

皆さん，自分の近くにいる若者たち，たとえば研究室の学生，院生，あるいは職場の若手社員たちに，必要を感じたらどんどんと厳しく躾をして頂きたい．躾の内容は，皆さんが身の回りで起こると不愉快に感じられることから始めてもいい．もちろん事前にかれらに，かれらが皆さんの所属するコミュニティの一員であることを十分認識させてからのことである．とにかく，わが国の若者の行動を今のまま黙認すると，これからの日本はどうなるのだろうか，という危機感に迫られての提案である．